

トマス・アクィナスの自然学における 必然性の根拠について

——「第一の道」に則して——

小林 剛

1 自然学における必然性の根拠

本稿では、トマス・アクィナスの自然学において、物体の運動、すなわち、場所の移動、質の変化、量の増減¹⁾を或る一定の目的へと秩序付けているものは一体何であるのか、また、その秩序付けはどれほどまで及ぶのかということ、トマスにおける神の存在証明「第一の道」に係わる議論に則して明らかにするつもりである。

このことがなぜ重要なのかというと、それは、このことによってトマスの自然学における必然性²⁾の根拠とその限界とが明らかになるからである。

では、もしそのような、物体の運動を或る一定の目的へと秩序付けることによって、自然学の対象全てに必然性を付与するものがトマスにおいて考えられているとすれば、それは一体何であろうか。それは、全ての物体の運動に影響を及ぼすものであるから、「第一の道」で証明されるような第一動者たる神であろうか。あるいはまた、「第一の道」をあらゆる作用因にまで拡大して適用した「第二の道」で証明されるような第一作用因たる神であろうか。あるいはまた、「第五の道」で証明されるような、全てのもの (res) を目的へと秩序付ける知性としての神であろうか。

これらの解釈は当たっていないというのが私の今のところの見通しである。というのも、もし、トマスにおいて、物体の運動を或る一定の目的へと秩序付けることによって自然学の対象全てに必然性を付与するものが神であるとすれば、そこには、多くの場合生じるがまれに生じないことがあるようなもの、すなわち、偶発 (casus)³⁾を含み得るようなものが存在する余地はない⁴⁾。なぜなら、アリストテレス・トマスによれば、偶発の原因は秩序の不在だからである⁵⁾。しかし、彼らによれば、多くの場合生じるがまれに生じないことがあるようなものはそういうものとして自然学の対象なのである⁶⁾。

では、上記のような、物体の運動を或る一定の目的へ秩序付けることによって自然学の対象全てに必然性を付与するものを明らかにすることはなぜ重要なのであろうか。多くの場合生じるがまれに生じないことがあるものがそういうものとして学の対象であるということは、アリストテレス・トマスの自然学のみならず、現代の自然科学についても言えることであるように思われる。しかし、そのような、現代風に言えば、或る事態の確率が高いということの實在的な根拠を明らかにするような理論は、現代の科学理論自体のなかにも科学に係わる現代の哲学のなかにも見出されないように思われる。しかしその一方で、科学者たちはそのような實在的な根拠を信じているように思われる。そのような科学者たちの信念の思想史的淵源を明らかにするという点に関して本発表は多少なりとも貢献できるのではないかと私は考える。実際、ガリレオ研究者のウィリアム・ウォレスによれば、ガリレオは主にコレギオ・ロマーノのイエズス会士たちを通してアリストテレス・トマスの影響を受けている。そして彼は、その帰納的手法にもかかわらず、自分の学を分析論後書的な意味での真なる学とみなしていたのである⁷⁾。

ではさらに具体的に、トマスの自然学において、物体の運動を或る一定の目的へと秩序付けているものは一体何であるのか、また、その秩序付けはどれほどまで及ぶのかということを明らかにすることが、そもそもなぜ、トマスの自然学における必然性の根拠とその限界とを明らかにすることになるのであろうか。

この問いに答えるためには、まず第一に、トマスの自然学における必然性とは一体どのようなものであるのかという問いに答えなければならない。そして第二に、この必然性の根拠とは一体何であるのかという問いに答えなければならない。

第一の問いに対する答えは以下の通りである。

アリストテレス・トマスによれば、自然学の対象において見出される必然性とは、必ず〜であるというような端的な意味での必然性ではない。そうではなく、物体の運動において或る一定の目的が達成されると前提することから来る (ex suppositione) 必然性である⁸⁾。

或る物体の運動において或る形相が現実化されるはずであるならば、その形相に対応する基体⁹⁾ (つまり動かされるもの) や動者¹⁰⁾ は必ず先在するだろう。しかし、それらの基体や動者が先在するからといって必ずしもその形相が現実化されるとはかぎらない。

アリストテレスとトマスが用いている例は以下の通りである。まず基体について言えば、もし切れるのこぎりがあるならば、鉄は必ずあったであろう。しかし、鉄があるからといって、かならずしも切れるのこぎりがあるとはかぎらない¹¹⁾。また、動者について言えば、もしオリーブの実が成るならば、オリーブの種は必ずあったであろう。しかし、オリーブの種があるからといってかならずしもオリーブの実が成るとはかぎらない¹²⁾。

上述の第二の問い、すなわち、上記のような必然性が成立する根拠は一体何かという問いに対する答えは以下の通りである。

それはまず何よりも、物体の運動において或る一定の目的が達成されるということである。なぜなら、上述の通り、トマスの自然学における必然性は、物体の運動において或る一定の目的が達成されるということを前提にしているからである。実際トマスもこの必然性について、「必然性の根拠 (ratio) は目的の側から措定される」「必然性の根拠は目的に従って措定される」¹³⁾と言っているのである。

それでは、物体の運動において或る一定の目的が達成される根拠は何であろうか。また、達成されるはずの目的が達成されない根拠は何であろうか。

トマスの自然学によれば、物体の運動において或る一定の目的が達成される根拠は、物体の運動がこの目的に秩序付けられていること、あるいは、物体の運動をこの目的に秩序付けるものである。逆に、物体の運動において或る一定の目的が達成されない根拠は、物体の運動がこの目的に秩序付けられていないこと、あるいは、秩序付けるものの不在である¹⁴⁾。

物体の運動が目的に秩序付けられただけでは目的は達成されないのではないかという反論も確かに出され得る。しかし、物体は上位の原因に従ったり従わなかったりする自由を有していない。だから、目的に秩序付けられていない原因による邪魔がないかぎりには、物体の運動は、目的に秩序付けられれば、目的を達成するべく活動して目的を達成する¹⁵⁾。

それゆえ、上述の通り、トマスの自然学において物体の運動を或る一定の目的へと秩序付けているものは一体何であるのかということを明らかにすることが、トマスの自然学における必然性の根拠を明らかにするのである。また、その秩序付けがどれほど及ぶのかということが、トマスの自然学における必然性の根拠の限界を明らかにするのである。

2 「第一の道」に係わる議論との関係

まず初めに、トマスの自然学において、物体の運動を或る一定の目的へと秩序付けているものおよびその限界と、「第一の道」に係わる議論との関係について簡単に触れておきたい。周知の通り、「第一の道」¹⁶⁾は次の二つの命題の証明からできている。すなわち、「動かされるものは全て他のものによって動かされる」という命題と、「動かすものがまた他のものによって動かされるという系列が無限に遡行することはできない」という命題との証明である。ところで、これらの命題の証明は、アリストテレスの『自然学』第八巻第五章に含まれる証明¹⁷⁾と、その言葉づかいに至るまで極めて類似している。そして、この『自然学』の箇所では証明されているのは、自分自身を動かすものの動かす部分、すなわち、何かの魂の存在だけである¹⁸⁾。しかし、トマスの言う神は決して何かの魂ではない¹⁹⁾。だから、「第一の道」によっては神の存在は証明され得ないようにも思われる。

しかし私は、「第一の道」をトマスのアリストテレス理解全体から解釈すれば、「第一の道」によって神の存在は証明され得ると考える。なぜなら、自分自身を動かすものの動かす部分、すなわち何かの魂も、さらに神によって動かされて動かすものであると私は解釈するからである。

アリストテレスとトマスの自然学によれば、今問題になっている『自然学』の箇所の証明において、自分自身を動かすものと言われているのは主として動物²⁰⁾と天(caelum)²¹⁾のことである。そして、自分自身を動かすものの動かす部分とはそれらの魂のことである²²⁾。

そして、動物の魂は、確かに、あらゆる種類の物体的運動の始原(principium)たり得る²³⁾。しかし同時に、自身が始原である全ての運動において天体によって動かされて動かすものである²⁴⁾。このことが明らかになるなかで、トマスの自然学において、物体の運動を或る一定の目的へと秩序付けているものが何であるのかということが明らかになる(本稿3参照)。

同様に、天の魂に当たる天体の動者である知性実体(これをトマスは天使と解する)も、確かに、あらゆる種類の物体的運動の始原たり得る²⁵⁾。しかし同時に、自身が始原である全ての運動において神によって動かされて動かすものである²⁶⁾。このことが明らかになるなかで、トマスの自然学において、物体の運動を或る一定の目的へ

と秩序付けているものの秩序付けはどこまで及ぶのかということが明らかになる（本稿 4 参照）。

3 物体の運動を目的へと秩序付けるもの

では具体的に、まず、トマスの自然学において、物体の運動を或る一定の目的へと秩序付けているものは一体何であるのかということを明らかにしたい。

動物の魂が、あらゆる種類の物体的運動の始源たり得ると同時に、自身が始源である全ての運動において天体によって動かされて動かすという事態は、一体どのような事態なのであろうか。

トマスの自然学によれば、確かに、動物の魂は、諸々の形相を有するかぎりにおいては運動の始原たり得る。しかし、これらの形相を或る一つのものに決定すること（determinare）によって、動物の欲求対象を或る一つのものに決定するという仕方では、動物の運動を或る一つの目的へと秩序付けているのは天体の動者たる知性実体である。

その理由は以下の通りである。

トマスは『定期討論集「悪について」』第六問主文で以下のように言う。

自然的事物のうちには形相が見出される。これは活動の始原²⁷⁾である。また、形相に伴う傾向性も見出される。これは自然的欲求と言われ、ここから活動が生ずる。（中略）自然的事物の形相は質料によって個別化された形相である。それゆえ、形相に伴う傾向性も一つのものに決定されている。

しかし、知性認識された形相は、普遍的なものであり、この形相のもとでは多くのものが把握され得る。だから、（中略）たとえば、もし職人が家の形相を普遍的に思い抱き、その形相のもとで家の様々な違う形が把握されるとすれば、職人の意志は四角い家を作ることも、丸い家を作ることも、他の形の家を作ることも傾かされ得る²⁸⁾。

ここで言われていることを一般的な例で言い換えると、たとえば、生き物の場合、確かに、植物は、成長する能力態（habitus）²⁹⁾を有している。そして、成長することを自ら欲求して³⁰⁾自ら現実に成長する。動物は、このことに加えて、場所的に移動する能力態を有している。そして、場所的に移動することを自ら欲求して自ら現実に場所的に移動する。しかし、いつどのような形でどのくらいの大きさに成長するのか、

いつどこへどのような仕方でも場所的に移動するのかということについては初めから決定されてしまっている。

ところで、トマスによれば、欲求を或る一つのものへと決定するということは、すなわち、欲求運動を何かへと適用するということである。そして、非理性的動物においてこの適用を行うのは刺激 (instinctus) である。

実際トマスは『神学大全』第二部の一第十五問第二項で以下のように言う。

〈第一異論解答〉

非理性的動物において見出されるのは、欲求が何かへとただ受動的にのみ決定されているということである。一方同意とは、欲求がただ受動的にのみ決定されるということではなく、むしろ、欲求を能動的に決定するということの意味する³¹⁾。

〈主文〉

同意とは、欲求運動を、何か為すべきことへと適用することを意味する。ところで、欲求運動を、何か為すべきことへと適用することは、その支配権のうちに欲求運動があるところの者に属する。たとえば、確かに、石に触れることは杖に適合するけれども、しかし、石に触れることへと杖を適用することは、杖を動かすということとその支配権のうちに有するところの者に属する。ところで、非理性的動物は自身の支配権のうちに欲求運動を有しておらず、非理性的動物におけるこのような運動は自然本性の刺激に由来する。だから、非理性的動物は、欲求しはするが、欲求運動を何かへと適用しはしないのである³²⁾。

ところで、トマスによれば、上記の刺激は天体に由来する。実際トマスは、「動物は、天体の刻印に由来する何らかの自然本性的刺激によって動かされる」³³⁾とか、「非理性的動物は、上位の作用者（天体）の刺激によって、個別的形相の在り方で決定された何かへと動かされる。この何かを思い抱くことに感覚的欲求が伴う」³⁴⁾とか言うのである。

しかしトマスによれば、自身のであれ、他のものであれ、何かの運動を目的へと秩序付けるということは知性的な者のみに属することである³⁵⁾。

だから、動物の魂の有する諸々の能力態を或る一つのものに決定することによって、動物の欲求対象を或る一つのものに決定するという仕方でも、動物の運動を或る一つの目的へと秩序付けているのは天体の動者たる知性実体と考える他ない。

それゆえ、以上のことから、トマスの自然学において、動物のみならず、全ての物

体の運動を或る一定の目的へと秩序付けているのは天体の動者たる知性実体であると私は解釈する³⁶⁾。

4 物体的運動の目的への秩序付けの限界

では次に、トマスの自然学において、物体の運動を或る一定の目的へと秩序付けている者の秩序付けは一体どこまで及ぶのかということを明らかにしたい。

天の魂に当たる天体の動者である知性実体が、あらゆる種類の物体的運動の始原たり得ると同時に、自身が始原である全ての運動において神によって動かされて動かすという事態は一体どのような事態なのであろうか。

確かに、3で明らかにした通り、トマスの自然学において、全ての物体の運動を或る一定の目的へと秩序付けているのは天体の動者たる知性実体である。しかし、アリストテレス・トマスによれば、その知性実体も、普遍的で完全な善である神を目的としてそこへと秩序付けられている。すなわち、神を欲求している³⁷⁾。そしてこのことによって神に動かされている³⁸⁾。

ところで、「第一の道」で言われるところの、動かされること、すなわち運動とは、単なる現実態ではなく、可能態に在るものの、そういうものであるかぎりでの現実態³⁹⁾でなければならない。トマスに従って言い換えれば、純粹可能態と現実態との中間的な在り方⁴⁰⁾でなければならない。というのも、もし動かされることが単なる現実態であるならば、純粹現実態である神も動かされる（この場合、自分自身に動かされる）ということになる。しかし、「第一の道」で証明される神は、何ものにも動かされないものである。それは「第一の道」の結論部分を見れば明らかな通りである。

では、天体の動者たる知性実体において、欲求に関して、可能態に在るものの、そういうものであるかぎりでの現実態とは、一体どのようなものであろうか。それは、トマスによれば、一つは、触れていない場所に触れること (attingere) への転化 (mutatio) である。もう一つは、善から悪への転化である⁴¹⁾。

これに対して、天使の考察は、形而上学に属することであり、今問題となっている自然学を逸脱しているのではないかという反論が出され得る。しかし、トマスによれば、天使が動者たるかぎりでの自然学において考察されること⁴²⁾、そして、自然学が形而上学から様々な原理を受け取ること⁴³⁾は一向に差し支えないことであると私は解釈する。

ではまず、天体の動者たる知性実体、すなわち天使が、触れていない場所に触れることへの転化を有するということはどういうことなのか。それは、天使が、触れていない場所に触れる、すなわち、力を及ぼしていない物に力を及ぼすことに向かう可能態に在るということである。

実際トマスは『神学大全』第一部第五十二問第二項主文で以下のように言う。

天使は有限な力と本質とを有する。一方、神は、無限の力と本質とを有し、万物の普遍的な原因でもある。それゆえ、神は、自身の力によって万物に触れているし、複数の場所においてのみならず、あらゆる場所に触れている。一方、天使の力は、有限であるので、万物には及ばず、限定された何らかの一なるものに及ぶ。では次に、天使が善から悪への転化を有するということはどういうことなのか。それは、天使が悪を為す、すなわち罪を犯すことに向かう可能態に在るということである。

その理由は以下の通りである。

トマスによれば、被造的知性の意志が神に秩序付けられるのは、神だけが普遍的で完全な善だからである⁴⁴⁾。ところで、「善から逸れない活動を自然本性的に有することができるには、普遍的で完全な善の特質が自然本性的にまた転化不可能的にその知性的本性に内在しているものでなければならない。そのような知性的本性は神の本性でなければあり得ない」⁴⁵⁾。被造的知性には普遍的で完全な善の特質が自然本性的にまた転化不可能的に内在していない。だから、被造的知性は、善から逸れない活動を自然本性的に有することができない。

だから、トマスの自然学において、全ての物体の運動を或る一定の目的へと秩序付けている天体の動者たる知性実体、すなわち天使は、あらゆる場所に力を及ぼすとは限らない。また、その意志は、あらゆる場所に力を及ぼしている神の意志と一致するとは限らない⁴⁶⁾。

5 結 論

トマスの自然学において、全ての物体の運動を或る一定の目的へと秩序付けているのは天体の動者たる知性実体、すなわち天使である。それゆえ、トマスの自然学における必然性の根拠も天使である。しかしその力はあらゆる場所に及ぶとは限らないし、その意志が、あらゆる場所に力を及ぼしている神の意志と一致するとも限らない。そ

してこの二つの限界こそが、自然学の対象であるところの、多くの場合生じるがまれ生じないことがあるものの反面、すなわち偶発 (casus) の根拠なのである。実際トマスによれば、偶発は、究極的には質料の不具合 (indispositio) によって生じる⁴⁷⁾。そしてそのような、天の力 (virtus) と対立するような質料の不具合は、神の働き (divina operatio) に由来するとされるのである⁴⁸⁾。

(付記：本稿は日本学術振興会特別研究員としての研究成果の一部である。)

註

- 1) Cf., *Phys.*, V, c.1-2.
- 2) 本稿で問題にする必然性は、『自然学』第二巻第九章で問題にされているような、もっぱら対象の側に存する実在的な必然性であり、ただ単に人間の知性能力の側に存する観念的な必然性は問題にしない。
- 3) Cf., *Phys.*, II, c.6; *In II Phys.*, 1.10, n.234 (*Phys.*, II, c.6 の註)。
- 4) Cf., *S.T.*, I, q.116, a.1, ad 2; *In VI Met.*, 1.3, n.1209.
- 5) 註 14 参照。
- 6) *Post. Anal.*, I, c.30, 87b19-27 (ラテン語訳の対応箇所は Marietti, n.263); *In I Post. Anal.*, 1.42, n.373.
- 7) William A. Wallace, *Galileo, the Jesuits, and the Medieval Aristotle* (1991), 特にそのなかの “Aristotle and Galileo”。
- 8) *Phys.*, II, c.8, 198b11-12, (Marietti, n.171); *In II Phys.*, 1.15, n.269 (*Phys.*, II, c.9 の註); *Phys.*, II, c.9, 199b34-35 (Marietti, n.184)。
- 9) トマスもアリストテレスも *materia* と言っているが (註 11 参照), ここは実体の生成消滅に限った話ではないと思われるので, 広義の *materia*, すなわち基体と解する。
- 10) トマスが挙げている精子や種子の例による (註 12 参照)。Cf., *In VIII Met.*, 1.4, n.1737. なお, アリストテレスは *Phys.*, II, c.9 で動者について触れていないが, 当然想定されていると思われる。
- 11) *Phys.*, II, c.9, 200a9-13 (Marietti, n.186); cf. *Phys.*, II c.9 全体。この例はもちろん比喩であって, 字義的に取れば技術の話であり, 自然の話ではない。; *In II Phys.*, 1.15, n.270 (*Phys.*, II, c.9, 199b34-35 (Marietti, n.184) の註); *In II Phys.*, 1.15, n.272 (*Phys.*, II, c.9, 200a12-13 (Marietti, n.186) の註)。
- 12) *In I Post. Anal.*, 1.42, n.374 (*Post., Anal.* I, c.30, 87b19-27 (Marietti, n.263) の註)。
- 13) *In II Phys.*, 1.15, n.272 (*Phys.*, II, c.9, 200a14-15 (Marietti, n.186) の註)。
- 14) *S.T.*, I, q.115, a.6, c; *S.c.G.* III, c.86, n.2627-2628; *Phys.*, II, c.8, 199a8-11.

- (Marietti, n.174) ; *Met.*, VI, c.2, 1026b29-33 (Marietti, n.549) ; *Met.*, XI, c.8, 1065a25-26 (Marietti, n.968) ; *In XI Met.*, l.8, n.2283 (*Met.* XI, c.8, 1065a25-26, n.968 の註).
- 15) *S.T.I.*, q.115, a.6, c.
- 16) *S.T. I.*, q.2, a.3, c.
- 17) 257b13-21 (Marietti, n.821-822) と 256a6-13 (Marietti, n.808).
- 18) *Phys.*, VIII, c.5, 256a19-21 (Marietti, n.808) ; 257b12-13 (Marietti, n.822).
- 19) *S.c.G.*, I, c.13, n.108 (「第一の道」の平行箇所).
- 20) *Phys.*, VIII, c.4, 254b14-17, (Marietti, n.791).
- 21) Cf., *Phys.*, VIII, c.6 ; *De caelo*, II, c.2, 285a29-30 (Marietti, n.236). トマスは *caelum* が *animatum* であるということ、知性実体が天体の動者であるという意味でのみ肯定する。しかし、知性実体が天体の形相であるかどうかについては態度を留保している。Cf., *De verit.*, q.5, a.9, ad 14 ; *De an.*, a.8, ad 3 ; *S.T.*, I, q.70, a.3, c. ; *De sp. cr.*, a.6, c.
- 22) *In VIII Phys.*, l.7, n.1023 (*Phys.* VIII, c.4, 254b14-24 (Marietti, n.791) の註). しかし一般的には魂は植物を含め全ての生きている物体の原理である。Cf., *De anima*, II, c.4, 415b7.
- 23) *De anima*, II, c.4, 415b21-24 ; *In II De anima*, c.7, ll.227-228 (*De anima*, II, c.4, 415b21-24 についての註). ここで言う *principium* とは基本的には *principium activum* のことであって、*principium passivum* のことではない。Cf., *In I De caelo*, l.3, n.22.
- 24) *Phys.*, VIII, c.2, 253a14-18 (Marietti, n.772) ; *In VIII Phys.*, l.4, n.1002. (*Phys.*, VIII, c.2, 253a7-21 (Marietti, n.772) の註) ; *Phys.*, VIII, c.6, n.847 ; *In VIII Phys.*, l.13, n.1080 (*Phys.*, VIII, c.6, 259b3-20 (Marietti, n.847) の註) ; cf., *S.c.G.*, I, c.13, n.106 (「第一の道」の平行箇所).
- 25) 動物の魂の場合と同様であるが、ここで言う *principium motus* とは *principium activum* のことであって、*principium passivum* のことではない。Cf., *In I De caelo*, l.3, n.22.
- 26) *Met.*, XII, c.7, 1072a23-27 (Marietti, nn.1066-1067) ; *S.c.G.*, I, c.13, n.108 (「第一の道」の平行箇所).
- 27) ただし四元素は単純物体であり、動かす部分と動かされる部分に分けられないため、自分自身を動かすとは言われない。Cf., *De verit.*, q.24, a.1, c.
- 28) *De malo*, q.6, c. アリストテレスもこのことは、大方においては認めるであろう。
- 29) 上記の *De malo* の引用で言われている *forma* とは、恐らく、*habitus* を有する *individuum* が有する *forma substantialis*, すなわち *natura* のことであろう。Cf., *De ente*, c.2. 魂を有する道具には働きのための *habitus* が必要だとトマスは言う。Cf., *In III Sent.*, d. 13, q.1, a.1, ad 4 ; *De verit.*, q.29, a.1, ad 9 ; *De verit.*, q.29, a.5, ad 2 ; *S.T.*, I-II, q.68, a.3, ad 2 ; *S.T.*, III, q.7, a.1, ad 3.

- 30) トマスは動物のみならず植物や無機物にまで「欲求」という言葉を使っている。
Cf., *S.T.*, I, q.80, a.1, c.
- 31) *S.T.*, I-II, q.15, a.2, ad 1.
- 32) *S.T.*, I-II, q.15, a.2, c.; cf., *Phys.*, II, c.1, 192b18.
- 33) *De sort.*, c.5, n.668.
- 34) *De malo*, q.6, ad 3. *instinctus* には *ex causa corporali* と *ex causa spirituali* とがある。ここで述べられているのは前者である。後者は神から来るもので、超自然的なものである。Cf., *S.T.*, II-II, q.95, a.7, c.
- 35) *S.T.*, I-II, q.12, a.5, c.; *S.T.*, I, q.18, a.3, c. もちろん、知性的な者も神を目的としてそれへと秩序付けられている。本稿3参照。
- 36) 以上のようなトマスの天体還元主義的傾向を示す他のテキスト：*In II Sent.*, d. 15, q.1, a.1, c.; *De verit.*, q.5, a.9, ad3; *In II De caelo*, l.4, n.342.
- 37) 註 45 参照。
- 38) *S.c.G.* I, c.13, n.108 (「第一の道」の平行箇所)；*Met.*, XII, c.7, n.1067；*In XII Met.*, l.7, n.2520-2521 (*Met.* XII, c.7, 1072a26-30 (marietti, n.1067) についての註)。
- 39) *Phys.*, III, c.1, 201a10-11 (Marietti, n.194)。
- 40) *In III Phys.*, l.2, n.285 (*Phys.*, III, c.1, 201a9-11 (Marietti, n.194) の註)；*In IV Sent.*, d. 1, q.1, a.4, q.2, c.
- 41) *S.T.*, I, q.9, a.2, c. ここで言われているのは、転化ではなく転化可能性 (*mutabilitas*) だという反論も出され得る。しかし可能性と言ってもそれは純粹可能態ではないのであるから、純粹可能態と現実態との中間、すなわち転化ということになる。註 40 参照。
- 42) *In De trin.*, q.5, a.2, ad 3.
- 43) *Ibid.*, a.1, ad9.
- 44) *S.T.*, I, q.59, a.1, c；*De verit.*, q.24, a.7, c.
- 45) *De verit.*, q.24, a.7, c.
- 46) これに対して、物体の自然本性的な運動を或る一定の目的へと秩序付ける意志が神の意志と一致しないというようなことはあり得ないのではないかという反論が出され得る。しかし私はそういうことはあり得ると解釈する。実際トマスは、「悪霊は不合理な意志によって神の知恵から(自分の)知性を引き離し、しばしば事物についてただ自然本性的な状態だけに従って判断を下す」(*S.T.*, I, q.58, a.5, c.) と言っているのである。
- 47) *In VI Met.*, l.3, n.1211；cf., *Met.*, VI, c.2, 1027a13-15；*S.T.*, I, q.115, a.6, ad 2.
- 48) *De verit.*, q.5, a.9, ad 2.